

いし、久しぶりに同じ町内に住んでいた登張と互いに往来し、山口時代のことを談じ合った。それがお雪さんとの永久の別れであった。その時は子供は亡くなっていた。それから23年後、昭和5年(1930)、「グラマツキー先生、飄然伯林より来たって信州浅間温泉に遊ぶ」という新聞記事を見た登張はすぐに連絡を取り、二人は会った。グラマツキーは髪だけは白くなっていたが、相変わらず精悍の気は眉字の間に溢れていた。が、談一たびお雪さんの上に及ぶと落涙ばかりしていた。登張は彼のために就職口を探してやったが、条件が気に入らず断った。その後船で米国へ立ったが、小遣い銭が不足で上陸出来ず、日本へ逆戻り。お雪さんの弟の世話でシベリア経由で帰国した。数カ月後ベルリンから登張の許へ「君の申し出を断ったのは自分一代の失敗だった、旅費だけは何とかして工面するから又しかるべき勤め口をお世話願いたい」と書いて来たが、登張はそれが困難なる旨を返事した。その後消息は杳として分からない。

グラマツキーは誠に風の如く来たり風の如く去る人で、ロマン気質の人だった。ヴェンクシュテルン及びナホッドの日本書誌によると、彼には日本関係の論文・エッセイ・翻訳が約30編あるが、殆どが若い時のもので、1924年(大正13)に「東アジアの勝利」という論文をアレキサンデル・スパンが発行していた『Das Junge Japan』誌に発表したのが最後で、その後は見当らない。生活が荒れるに従い研究意欲を失ったようだ。元来フィロロギーを専門とする天才肌の学者であり、世が世ならばカール・フローレンツやグンデルトのようにすぐれた日本研究家として後世に名を残したのではないか。

五高不敬事件とエルドマンズデルフェル

1899年(明治32)2月11日、紀元節の式典を挙行中の熊本の第五高等学校で一つの事件が起った。同校でドイツ語とラテン語を教えていた傭外国人教師エルドマンズデルフェルが御真影に拝賀の札をせず、途中から退場してしまったのである。これを国粋派の生徒が目撃し、新聞社へかけこみ訴えた。そして事件が新聞紙上で報道されるや、五高开校以来の大きな騒ぎとなった。

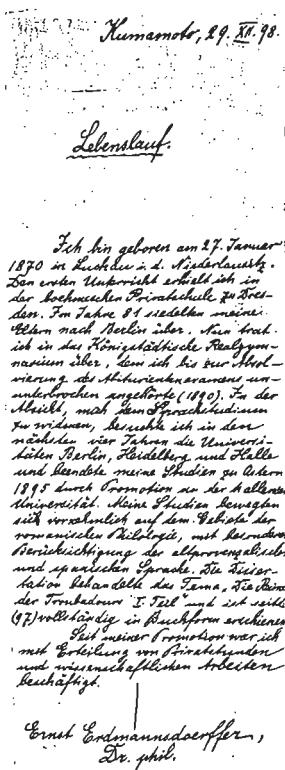
旧制高校での不敬事件としては1891年(明治24)に、第一高等中学校で起きた内村鑑三の教育勅語に対する敬礼拒否が有名であるが、その余韻は保守色の強い熊本でまだくすぶっていたのである。

ところでこの事件は、外人事件または独乙人事件の呼称で主に熊本の近代史研究家や漱石研究家の間で知られているが、その場合関心は事件そのものに向けられ、当のドイツ人教師については記述したものが少ないようである。その点に不満を感じたので少し調べてみた。

熊本大学所蔵の五高関係史料の中に、1899年(明治31)12月29日付のエルドマンズデルフェル手蹟の履歴書(独文)一通がある。これによると、彼の来日までの経歴は次のごとくである。

エルンスト・エルドマンズデルフェル(Ernst Erdmannsdörfer)は、1870年(明治3)年1月27日、ニーダーラウジッツ(現在ポーランド領)のルツカウに生まれた。最初の教育をドレスデンの私立ベーメン学校で受けた。1881年に両親がベルリンに移住したので、それにと

ないエルンストもベルリンの王都実科高等学校に学ぶことになった。そして1890年、同校の卒業試験に合格した。その後、言語研究の目的のために4年間にわたって、ベルリン、ハイデルベルク、ハレの各大学において学び研鑽をかさねた結果、1895年にハレ大学より学位を授与された。彼の専門は主としてロマン言語学の分野であって、特に古代プロヴァンス語とスペイン語には力を入れて研究し、学位論文もトルバドゥールの押韻に関するものであった。その第一部は1897年に一冊の本となって出版された。学位を得てから以後、個人教授の仕事と学術研究に従事していた。なお、ハイデルベルク大学教授で歴史家として著名なベルンハルト・エルドマンズデルフェルは叔父にあたる。ちなみに、最近刊行された箕作元八の滞欧『簞梅日記』にしばしば登場するエルドマンズデルフェルはこの歴史家の方である。



エルドマンズデルフェル
手蹟の履歴書

エルドマンズデルフェルは敬礼の際低頭の様子が見られなかった。これを目撃した生徒が九州日日新聞社に通報、新聞社がこれを問題にして採り上げ、報道するに及んで、事件が公けになったのである。ただし、新聞に載ったのは事件の翌日ではなく、3日後の2月14日に出た。「高等学校の不敬事件」という見出しを持つその記事は、天下の秀才が集まる最高学府の高等学校でかかる不敬事件が起きたのはまことにけしからぬことだとし、当日の状況を次のように報じている。

事の起りを聞くに去十一日午前には例年の通り紀元節の拝賀式を挙行し中川校長以下職員順を追ふて拝賀しつゝ、今は外国語学教師フアーデル氏も拝賀を終りたればエルドマンズデルフェル（独逸語教師独逸人）に及びたるに彼れエルドマンは立つたるまゝに動きもせず

次の職員某氏は再三之を促かせるも彼は首を横に振りて之に応ぜざれば孰れも憤怒を抱きエルドマンを残したるまゝ、順次に拝賀をしたり此様子を見たる二三氏は左右より駆け付てエルドマンに説諭したるも彼は応せん様子もなく二三歩退きて壁に臂を掛け半休憩の姿にて立ちたれば職員中にはファードル氏に旨を通じ式場よりエルドマンを退出せしめたりファードル氏が此旨を通するやエルドマンは腕を張って潤歩し終に場外に出で去りたり。

●高等學校の不敬事件
去十一日は、皇太子御即位の紀元祭に當り、五高に於て、皇太子御即位の聖影に對し、奉りて不敬を演じ、兼て拝賀式に臨むる職員學生を蔑視せるもの其罪断じて問ふべし」と述べ、事の重大性を指摘している。



事件を伝える「九州日日新聞」ファードル(左)とエルドマンステルフェル(明33・2・14)

彼もよくこれを承知して出席したという。それに式場においても二、三の職員が拝賀の礼を行なうように懇々と示諭したにもかかわらず、彼はそれに応ぜず途中より退場したのは、式典を揉欄したことになる、これは不敬とみなされるとした。そして最後にこの新聞論者は、「此最高學校に於て不敬なる外国人を傭ひ入れ而して一挙一動総て不敬に渉る如きあらば教育の効果は得て期すべからずエルドマンの事の如き聖影に對し奉りて不敬を演じ兼て拝賀式に臨める職員學生を蔑視せるもの其罪断じて問ふべし」と述べ、事の重大性を指摘している。

一方、五高においても、エルドマンステルフェルの当日の挙動は職員生徒の憤慨を惹起した。中川校長も初め彼が退場したのを見て、しまったと思ったが、式が終ってから調査したところ、拝賀を欠いたのは病気のためであって、決して真に宗教上の信條からそうしたのではないことが分かった。

それでもエルドマンステルフェルは、拝賀を終わらないうちに退出したことを心靜かに反省する時、恐懼措くところを知らず、失態の謝罪状を中川校長に提出した。

中川校長は、翌2月12日は日曜日にもかかわらず緊急に職員會議を開き、処分方法を話し合った。その結果、エルドマンステルフェルは来日以來、日が浅く學校儀式の習慣などは不案内なうえに、当日は朝から頭痛がして進退度を失ひ、そのために拝賀できなかったのもであって他意はない。それで頭痛がおさまり次第あらためて奉安所で御眞影に拝賀させることになった。そして翌13日、エルドマンステルフェルは中川校長、上田整次教授、ファードルの立合いのもとに奉安所でとどこおりなく拝賀を終わった。

そこへ14日になると、前述の九州日日新聞の記事が出て、事件が表沙汰になるのである。困惑した中川校長は直ちに武藤虎太、黒木植の二教授を新聞社に派遣して釈明を行わせている。新聞社側は容易に納得しなかったが、武藤の回想によると(『中川元先生記念録』大正7年)「社長固く新聞の威嚴を論じて取消の請求に應ぜず深更までわずか論談の後纒に事情を翌日の紙上に掲げて世間の疑惑を解くべきを約」したという。そして翌15日の新聞に載った記事は

さらに新聞によると、その外国人教師はや、もすると式礼に習はず時として不敬無礼の挙があるのは免がれないと、当日も明治27年から五高教師を務め何度も拝賀の礼を行なった経験のあるファードルが、あらかじめエルドマンステルフェルに式礼の事を説明し、

「五高不敬事件落着」という見出しではあるが、内容は厳しいものであった。そこにエルドマン スデルフェルが中川校長に提出した謝罪状（訳文）が引用されている。

今日学校儀式の節出来致候ことにつき左の一言申訳致度存候

実は今朝甚た頭痛難儀致候また公然出席すべき旨通知をなし呉れ候人も無之義故学校儀式に欠席致さんと存居候得共欠席致候ては悪しくも思はれ申さんかと存し遂に列席致候事に決定致候併し同儀式の習慣などの事は一向に存不申候得共列席致候も他の方々の感情を害しました公けの障けを起さん忤なる挙動をなさん為めには毛頭無之欧州の習慣とは全く異なりたるこの儀式に与り終始諸君の為すところを同様にせんとの目的なりしも何分小生には目馴れぬことのみにて心中錯乱致し病氣ますます悪しく相成遂に敬礼の時機を失し候次第に有之候

先陳之如き次第故今日小生の行動は御有免被下度奉願候

千八百九十九年二月十一日熊本にて

ドクトル、エルドマン スデルフェル

第五高等学校長中川元殿

そしてこの謝罪状について次のように批評している。事実は右の通りであっても失態は失態であり、御真影に拝賀しなかったのは、病気にせよ事情不案内にせよ不敬に変わりはない。不思議なのは病気のためと言いながら、式に参列し、直立し、式場を歩行し、退場していることである。そういう人が拝賀できないとは考えられない。真の理由は、彼が日本の国風国典を知らなかったことによると認められる。何故なら、彼は来日以来なお日が浅く、教習を受ける機会がなかったとすれば、神聖な式場に出て進退其度を失うのは当然であるからだ。「式場に於て進退其度を失ふは総て不敬なり。エルドマンの不敬事件は乃ち是なり。彼れ或は朝来脳病にてありしならん、然れども其頭痛が失態を醸さしめたるは事情を知らざる一念より刺撃せらるゝ所ありたるに依るべし。」従って本人に罪があることは明らかだが、学校管理者にも責任がある。外国人が拝賀を望んだら真に敬意を表わせるように式典を習わせておくべきである。

以上は九州日々新聞の論調であるが、同じ熊本で発行されていた九州新聞（2月14日）は扱いても小さく、責任を特に追求しなかった。ただその際、拝賀はむずかしい儀式ではなく、繁雑でもない。外国人にも出来るものである。それなのに心覚つかないといって拝賀を辞退したというのは、この外人は一般外人の剛腹にも似合わずよほど心弱き人なのであろう、と述べているのは印象的である。これは『龍南会雑誌』82号（明治33年10月）の雑報欄にエルドマン スデルフェルはメランコリーな人であったと記されていることとも関係があるだろう。いずれにしろ、彼のそうした性格が、謝罪文にあるような事態を惹起した一要因になっていると見てよいであろう。

さて処分については、事件の発端をなしたドイツ人教師に対しては前述のように校長に謝罪文を提出させること、改めて拝賀を行わせること、の二つの学内の処分でおさまり、契約中断の措置は取られなかった。しかし一方、中川校長は、明治33年4月、内閣総理大臣山縣有朋より「訓諭方ノ不行届」として譴責処分を受けた。

エルドマンズデルフェルは熊本時代、『龍南会雑誌』第78号（明治33年5月）に「ジャン＝ジャック・ルソー」（独文）を発表している。ルソーの生い立ちから、スイス放浪生活を経て、自己教育を決意、パリに出てディデロ、グランベールなどの文学者たちとの交流、やがて一生を連れ添うテレーズ・ル・ヴァスールとの出会いまでを描いている。この論文は彼がやがて1900年（明治33）7月末日を以って五高を満期解傭となったので未完に終わっている。

熊本を去った彼は東京に移り、陸軍中央幼年学校のドイツ語教師となった。傭期は、明治33年8月8日より34年3月31日までと短かったが、この時期彼は日本への理解を深めたようである。熊本での苦い思い出も彼を日本嫌いにするとはなかったようである。帰国後、彼は日本に関する文章をいくつか書いているがその一つ、『ヴェステルマンス絵入ドイツ月刊誌』97号（1904）に発表した「東京散歩」（Wanderungen durch Tokyo）は、東京の下町に残る江戸以来の風物や人情を写真入りでスケッチ風に紹介したもののだが、作者が古い日本に対してエキゾチックな興味を持っていたことをよく示している。

さて、エルドマンズデルフェルは中央幼年学校の教師を解傭になった4日後、1901年（明治34）4月4日横浜解纜のケーニヒ・アルベルト号で帰国の途についた。この時、ドイツに留学する大村仁太郎、滝簾太郎、白鳥庫吉、大森英太郎、田中宏らが同船していた。

明治33年当時の五高医学部のドイツ語教育

1887年（明治20）に長崎に第五高等中学校医学部が置かれたとき、外国語としては第一年に英語が課せられたが、これは当時の医学部としては異例である。当時医学部・医学校においては独語が課せられるのが一般的であったからである。英語が課せられたのは第五高等中学校医学部の前身である長崎医学校にアーノルドとアムアットという英米の二人の医学教師が招聘されていたためであろう。というのはこの二人が解雇された後では、英語に代わって医学科については「外国語ハ随意科目トシテ独逸語ヲ四ケ年通シテ毎週三時間ヲ課ス」と定められたからである。薬学科については同じく随意科目として3年間を通じて週3時間と定められた。

ところで『独逸語学雑誌』第11号（明治33年3月15日発行）に「第五高等学校医学部独逸語教科細目」が掲載されている。教科書と担当者を記したものである。当時、五高校長は中川元、医学部主事は村上安蔵であった。

先ず医学科第1年級に対しては、「ボック第一読本購読及文法教科書」、第2年級に対しては「独文読本第一購読及文法教科書及和文独訳」と定め、担当者はいずれも荒間淳吉である。第3年級に対しては「第一高等学校編纂読本第二及第一購読並ニ医学的記事文ヲ筆記訳読セシメ併セテ文法文章論ノ応用ヲ口授ス」とあり、担当者は高屋賀祐。もう一つは「独逸文法教科書講義及和文独訳」で、荒間の担当。第4年級に対しては「医学的記事文ヲ筆記訳読セシメ併セテ文法文章論ノ応用ヲ口授ス」「独逸文法教科書講義及和文独訳」で、高屋の担当。

一方、薬学科は1年級が独逸文法教科書とボック読本の第一、2年級が同じく独逸文法教科書とボック読本の第二、3年級は文法教科書と和文独訳、並びに「化学的記事及薬学的記事ヲ